●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 9-11

# 性成熟

目次


要　約 …… 2

はじめに …… 6

1. からだの変化 …… 7

- 初潮のあった子ども …… 7
- 生理中のようす …… 10
- 男子の身体的変化 …… 12

2. からだの変化の受けとめ方 …… 13

- 初潮を迎えたときの気持ち …… 13
- お母さんはよろこんでくれたか …… 15
- 女子の中の成熟拒否 …… 16
- 性成熟への対応をめぐって …… 18
- 身体的変化を話題にするか …… 20

3. 異性への関心 …… 22

- 雨夜の品定め …… 22
- クラスの雰囲気 …… 25
- 好きな子(異性)がいるか …… 28
- 好きな子とのつきあい方 …… 30
- こんなふうにつきあいたい …… 33
- どんな雑誌を見ているか …… 35

地球社会の子どもたち ㉑
日本ーその6　遊　び …… 深谷昌志 …… 38

資料1　調査票見本 …… 43

資料2　学年・性別集計表 …… 58


※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# 調査レポート
# 性成熟
# 要約

東京学芸大学教授　深谷和子
千葉県総合教育センター　中原美恵

## 1．調査の目的

発達加速がもたらした身体的早熟化の状況を把握するとともに、それを子どもたちがどんな思いで受けとめているのかを探ること。また、それによって前思春期の性成熟への対応に関する問題点を見いだすこと。

## 2．初潮のあった子

4年生で1％、5年生で8％、6年生で30％の女子がすでに初潮を迎えている（図1）。中には4年生以前に初潮のあった子（8％）も含まれており、性成熟の前傾化をうかがわせる。（図2）

## 3．初潮は、夏休み中に……

初潮の時期は、6月から9月が比較的多く、経験者の25％が8月に初潮を迎えている。次いで、4月が13％と高い。（図3）

## 4．生理中はやはり不安

生理のとき、人に知られないよう気をつけている子が79%。また、生理痛や気分の変化など不快な症状を訴える子も半数近くにのぼる。（図６）

## 5．女子にくらべ、男子の成長は緩やか

４年生から６年生まで、からだつきが少しずつ変化し、変声期を迎えた子が36%、ヒゲがはえてきた子が20%と男子の性成熟は全体に緩やかに見える。（図７）

## 6．初潮をよろこべない母と子

初潮という性成熟のサインをよろこべない子どもが７割にものぼる（図８）。さらに、子どもの目からみると、母親の約４割が、娘の初潮を積極的によろこんでくれていないという。（図９）

## 7．女子の中の成熟拒否

胸がふくらんでくるという身体的変化に対し、「うれしくない」65%、「いやだ」59%と多くの子どもたちが嫌悪感をもって受けとめている（図11）。将来的にも豊かな胸の女性像を避ける女子が６割と成熟拒否の様相が濃い。（図12）

調査レポート／性 成 熟

要　約

## 8．身体的変化についての準備

初潮については、小学４、５年生の時期に知識を得ており、情報源は、母親、養護教諭、友だちの順である。(図14、図15)

女子はからだの変化について、友だちや母親と話す機会を持っているが、男子は寡黙である。(図17、図18)

## 9．クラス内の男女の仲は、今ひとつ

男女の仲があまりよくないクラスのほうが多く、男女が激しく対立する雰囲気も小学５年生を中心にみられる。(図21、図22)

一方、３クラスに１クラスでは、１組以上の仲よしカップルがおり、異性への接近も進んでいる。(図24)

### ●調査概要

1.調査主題　性成熟

2.調査視点　性という、きわめて個人的で微妙な問題を思春期前期の子どもたちはどのように受けとめているのか、また、われわれおとなが何をどのように配慮していくべきなのかについて考察してみた。

3.調査項目　からだの変化、友だちとの話題、好きな異性とのつきあい方、お父さん（お母さん）との話題、雑誌の購読状況など。

## 10. 好きな異性はいるが……

好きな子のいる割合は、男子で28%、女子で55%。そのうち、半数近くが同じクラスの子との関係である（図25、図27)。女子のほうが対異性行動に関心は高いが、つきあい方は、イメージ・レベルのものが多い。(図28)

## 11. 1対1の交際は、まだ早い

男子の約6割、女子の7～8割が、1対1の交際は、小学生では早すぎると考えている。(図30)

## 12. 性情報や性的刺激との接触

中学生のデータにくらべ、小学生に対してはそれほど多大な性情報が入っているとはいえない(図31)。「性教育」をどの時期に行うべきか、そのあり方についても考える必要がありそうである。

4.調査時期　1989年9月～10月
5.調査対象　東京、千葉、埼玉の小学4・5・6年生
6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7.サンプル数　(人)

| 学年／性 | 男　子 | 女　子 | 計 |
|---|---|---|---|
| 4　年 | 375 | 335 | 710 |
| 5　年 | 404 | 389 | 793 |
| 6　年 | 383 | 376 | 759 |
| 計 | 1,162 | 1,100 | 2,262 |

# はじめに

近年の子どもの体位の向上ぶりには、目を見はるものがある。これに伴い、女子の初潮年齢の早まりに代表される身体的な、いわゆる早熟化も進んでいるといわれる。加えて、性情報や性的刺激が子どもの世界にも流れ込むなど、今日子どもの成長をめぐる状況は大きく変化しているかに見える。

こうした中で、子どもたちはどのように自分の"性"と出会い、これを受け入れていくのだろうか。おそらく、子どものからだからおとなのからだへと変わりゆく自分を、つまり次第に「おとなになってゆく」自分を受け入れることは、彼らにとってそうたやすいことではないはずである。まして、心身の成熟がアンバランスなまま、より早い時期にこの課題に向かう子どもたちにとってはなおさらであろう。

こうした点から、いわば思春期の入口にある小学高学年の子どもの性成熟に注目し、その様相と彼らの対応について探ってみたいと考えた。

しかし、本来ひっそりと内面に隠され、静かに進行してゆく性格をもつテーマだけに、調査にあたって十分な配慮と工夫が求められる。このため、男子、女子それぞれに異なる調査票を用意し、表現についても慎重に検討することで作業が進められた。また、とかく"性"の問題はタブー視されがちなため、調査依頼にも苦心したが、幸い東京、千葉、埼玉の6つの小学校のご理解をいただいて、本調査を実施する運びとなった。ご協力くださった子どもたちと先生方に心からお礼を申し上げたい。

調査対象となったのは、小学4、5、6年生2,262名の子どもたち。調査時期は、平成元年9月から10月である。

# 1. からだの変化

いわゆる思春期は、子どものからだからおとなのそれへと移行する時期である。この時期のからだの変化は「変態(metamorphosis)」という表現がふさわしいほどに急激で徹底的なものである。特に、それは女子において著しいといわれている。

思春期の入口にさしかかった小学校高学年の子どもたちは、どんなふうにこうしたからだの変化と出会っているのであろうか。まず、女子を中心に、子どもの身体的変化の実態について探ってみることにしよう。

## 初潮のあった子ども

子どもの早熟現象の指標として、初潮年齢の早まりが取り上げられることが多い。ここでも、まず調査対象となった1,100名ほどの女子にすでに初潮があったかどうかたずねてみよう。図1がその結果である(ただし、250名は無回答)。

さすがに4年生では、まだ1%(2人)と少ないが、5年生で8%(26人)、6年生で30%(99人)と、すでに初潮を迎えている子が127人にものぼった。さらに図2をみると、4年生までに初潮を迎えている子がそのうちの8%、最も早い子では、小学2年生で、身体的性成熟との出会いを体験しているという。改めて、その早まりと、この時期の成長の速度がひとりひとりの子どもによってずい分ちがっているということがわかる。

初潮の時期は、図3に示されたように8月の夏休みが最も多い。7月から8月にかけ、

ほぼ3分の1近くの子どもが初潮を迎えている。家庭における対応の準備がやはり大切なようである。また、新学期のはじめの月に始まる子もおり、学校生活への緊張が高い時期だけにとまどいも大きいのではと気になるところである。経験的にも、春から夏にかけての子どもの身体的変化は大きく、この時期をめざして初潮指導や対応への準備を進めているところも多いようである。

図1　初潮があった子

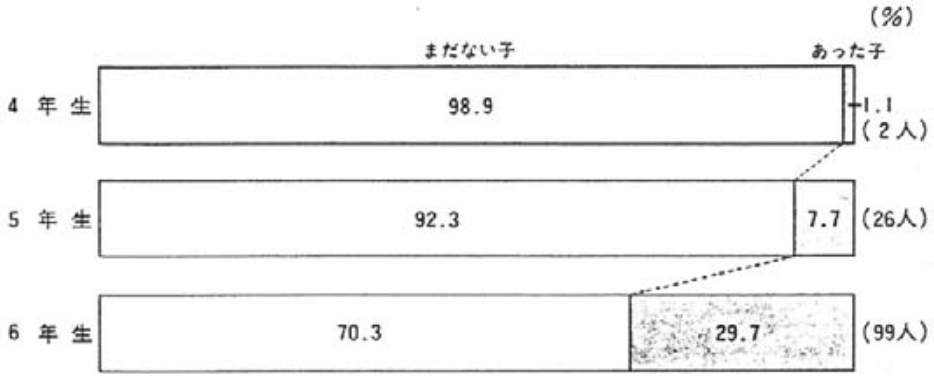



図2　生理が始まった学年

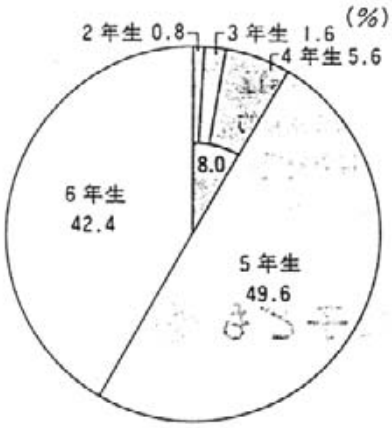
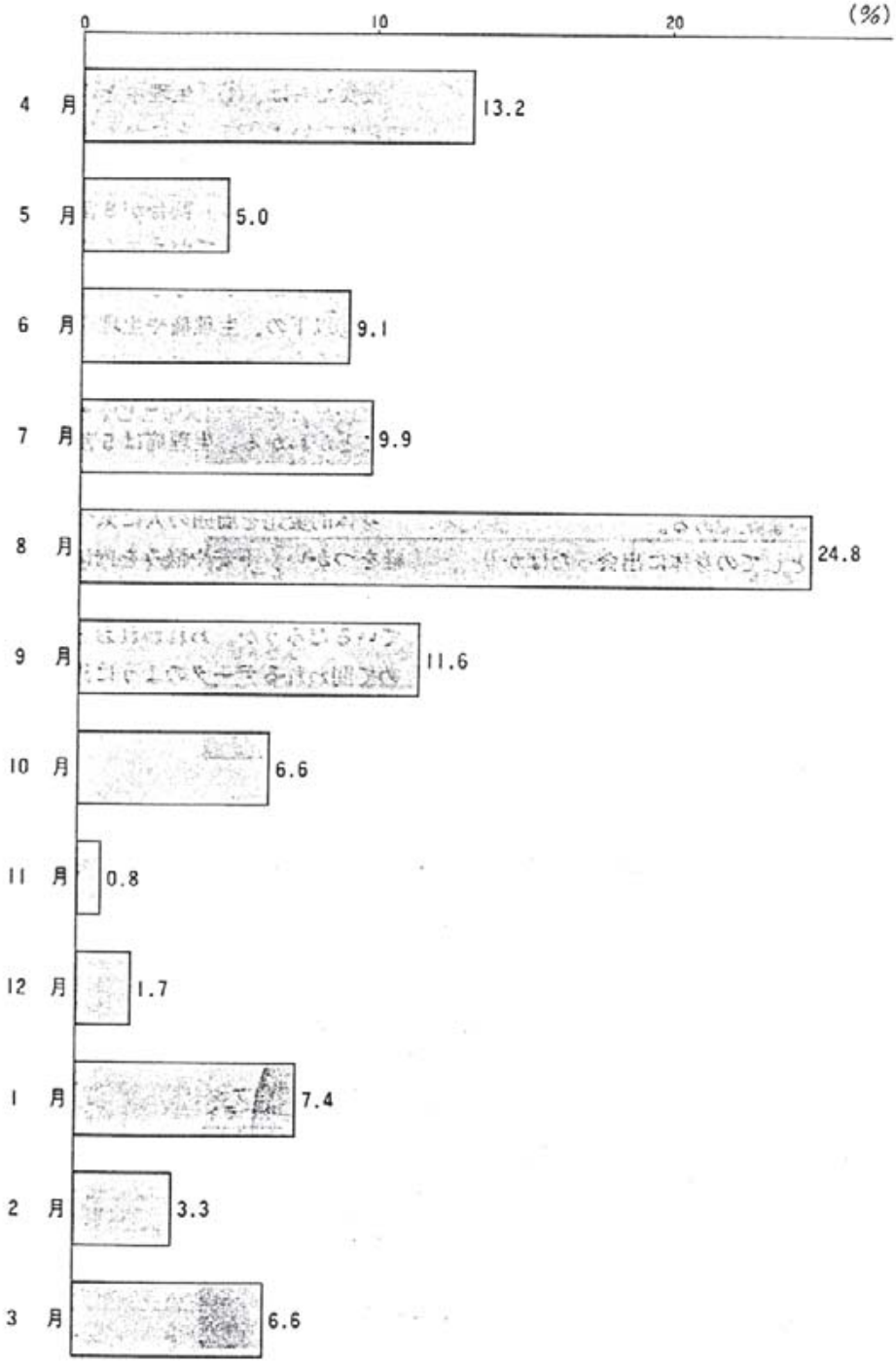


図3　何月に始まる子が多いか



## 生理中のようす

次に、初潮があったと答えた127人の女の子たちに、その後の生理のリズムや状態をたずねてみることにしよう。

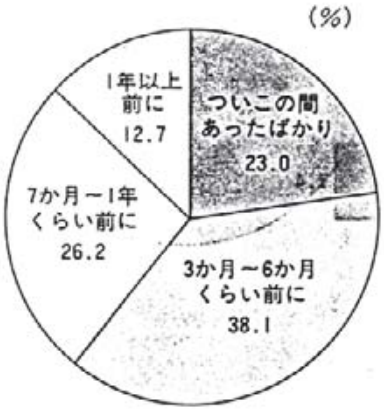
図4には、初潮後の期間を示したが、ほとんどの子どもが1年未満であり、このため生理のリズムは、図5のようにまだまだ不安定である。5、6年生でも3分の2の子どもが生理のリズムは安定したものでないと答えている。初潮を迎え、自分の性的成熟に直面した子どもたちだが、おとなのからだになるまで、その後しばらく不安定な時期を過ごさなければならないようである。

では、女性としての身体に出会ったばかりの子どもたちは、どんな思いで自分の不安定な生理とつきあっているのだろうか。図6に、生理中の状態についてたずねた結果を示した。

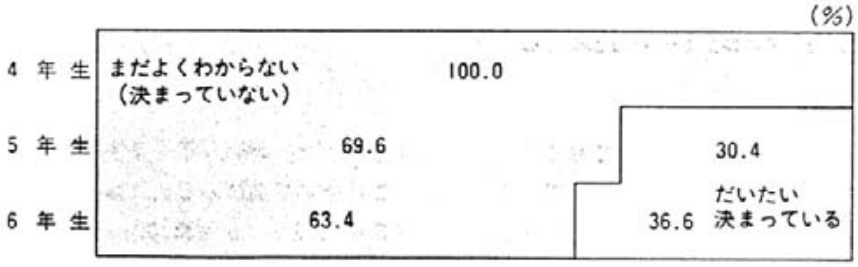
彼女たちは、①「生理中ということを人に知られないように」とにかく気をつかっているようである。「とても」と「少し」を合わせると「気をつける」割合が8割にものぼる。また、生理の手あてがうまくできているかという不安を抱く子どもも6割近くいる。さらに、③以下の、生理痛や生理中の疲労感、気分の不安定さについての項目をみると、かなりの割合で生理期間中に不快な思いをしていることがわかる。生理痛は5割の子に、疲労感は4割の子にみられるという具合である。

身体的変化を周囲の人に気づかれまいと神経をつかい、不安や悩みを内に秘めて過ごす子どもたちをどれだけ理解し、配慮してやれているだろうか。われわれおとなの姿勢が改めて問われるデータのように思われる。

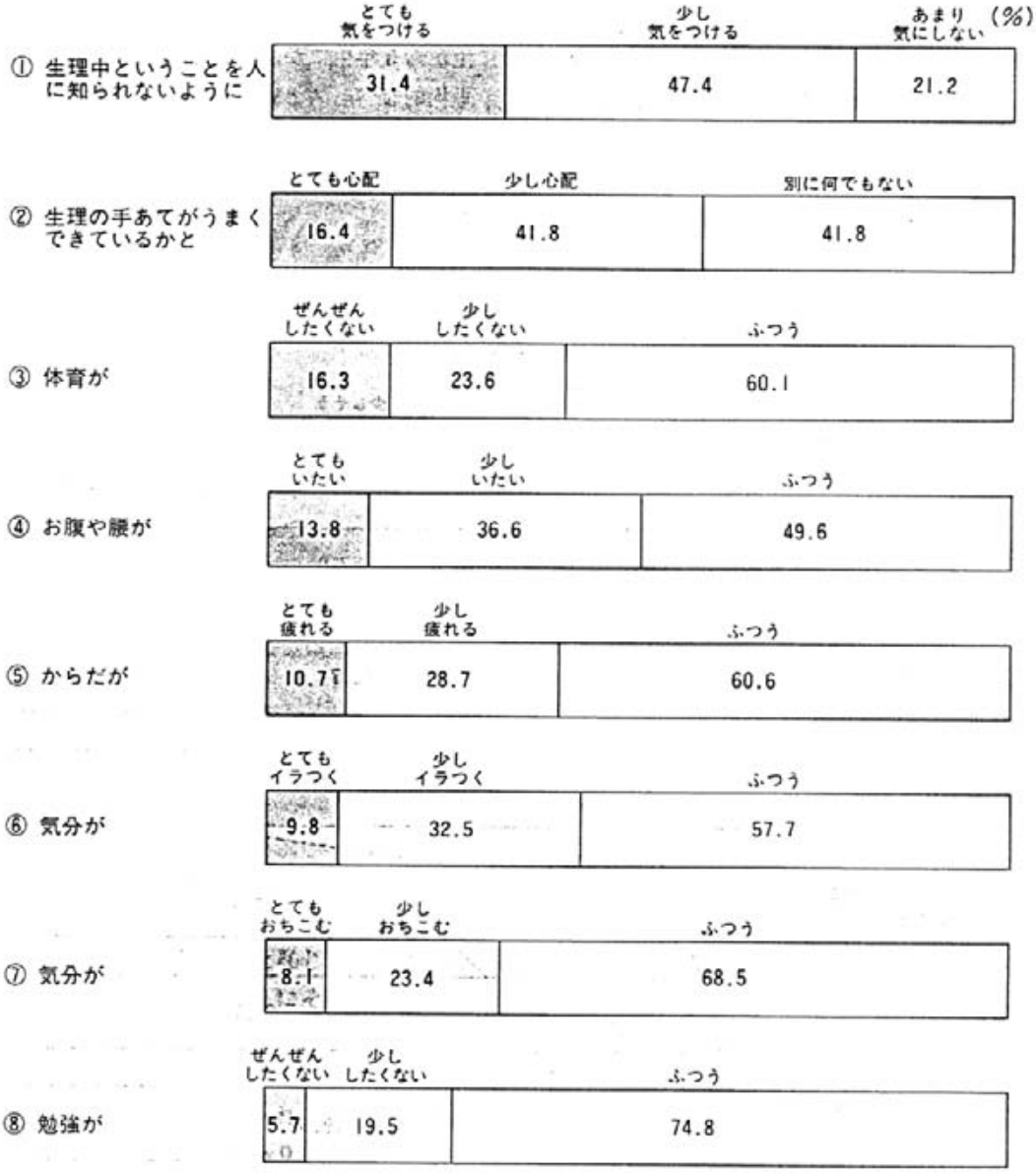
図4　初潮があってからどれくらい経っているか



## 図5　生理のリズム




## 図6　生理中の状態



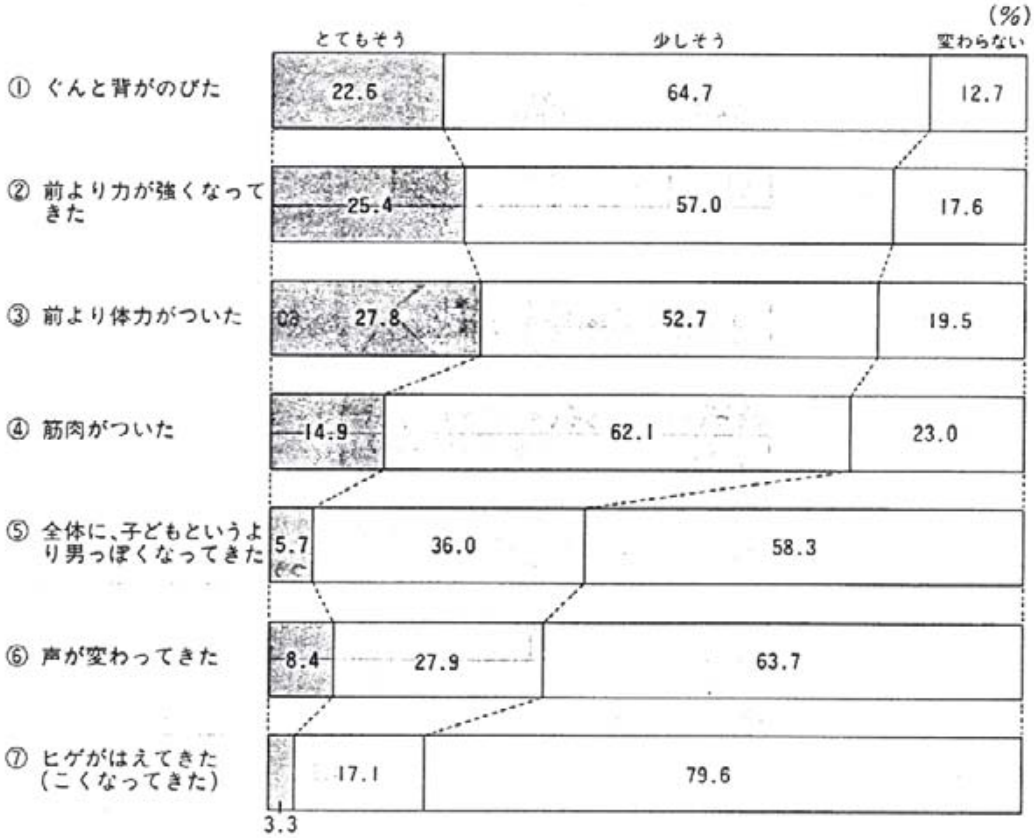
## 男子の身体的変化

次に、男子の変化についてもみておこう。第二次性徴の発現を代表するものとして、女子では初潮という明らかなサインがあるが、男子の場合はつかみにくい。ここでは、体格、変声、発毛（ヒゲ）など外側からとらえやすい身体像の変化をたずねてみた(図７)。「この１年くらいでどこか変わってきましたか」とその成長感をきくと、「背がのびた」「力が強くなった」「体力がついた」などの項目で４分の１の子どもが「とてもそう」と答えている。身体的発育に加え第二次性徴の面でも、変声期を迎えている子が36%、「ヒゲがはえてきた」という子も２割ほどいる。

これを学年別にみると、変声（４年32.5%〈５年42.6%〉６年33.3%）、ヒゲがはえた（4年14.7%〈５年30.2%〉６年15.6%）となり、５年生での成長感がやや高いことがうかがわれる。

子どもからおとなへの身体的変化は、早い子どもでは、３年生あたりから始まり、４年生から５年生にかけてぐっと進むというのが平均的なペースといえよう。また、女子にくらべ、男子の変化はゆっくりと時をかけて進むもののようである。

図７　この１年間の成長感
（男子のみ）



# 2. からだの変化の受けとめ方

これまでみてきたように、早熟なタイプの子どもでは、すでに3年生くらいからおとなのからだへの変化が始まっている。

身長・体重の急激な増加やからだつきの変化、そして第二次性徴の発現、その基盤にあるホルモンの急激な変化と、ほんの3～4年の間に自分のからだに起こる変化に子どもたちはどんな思いで対応しているのだろう。「初潮」という大きな変化を自分のものとして引き受けた女子のデータを中心に、このあたりを探ってみよう。

## 初潮を迎えたときの気持ち

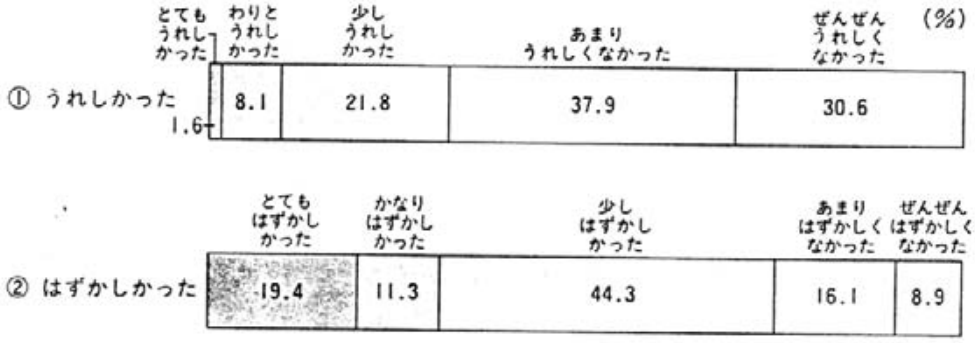
おそらく、初潮のときの体験を全く覚えていないという女性はそういないだろう。どんな女性にとっても、驚きと恥じらいとよろこびと……様々な思いとともにそのときを迎えたはずである。では、子どもたちにもこの点をたずねてみよう。図8がその結果である。

初潮があったとき、「うれしかった」と答えた子は、「とても」「わりと」を合わせても10%にしかならない。むしろ、「うれしくなかった」子のほうが69%と断然多い。5年生と6年生をくらべてみると、「うれしくなかった」子が5年生84%、6年生65%となっており、早熟な子どものとまどいが感じられる。また、初潮を「はずかしい」と受けとめる子も多く、「とても・かなりはずかしかった」が31%、これに「少し」を加えると75%

にものぼる。これも学年差をみると、5年生で68%、6年生で77%と、学年が上がると「はずかしい」気持ちがややふくらむ傾向にある。

考えてみると、初潮を迎えた子どもたちは、5年生で全体の8%、6年生で30%であるから、何といってもやや早熟なタイプの子どもたちである。周囲の子が変化していないのに、自分だけが変わってゆくという違和感が、成長へのとまどいやはずかしさにつながったとしても当然かもしれない。こうした心細さを支えるのは、ともに成長をよろこんでくれるおとな、特に母親の存在のように思われるのだが、母親たちの対応はどうだろう。

図8　初潮を迎えたときの気持ち



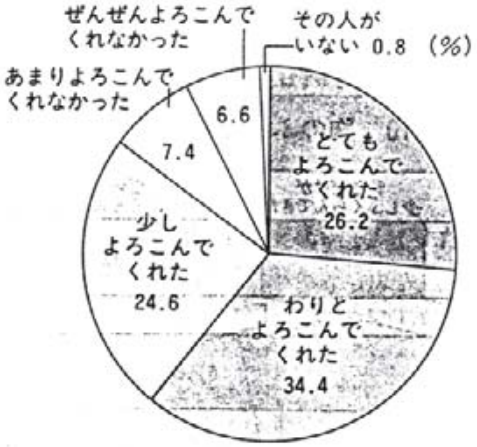
# お母さんはよろこんでくれたか

ちょっぴり早熟な娘が初潮を迎えたとき、母親はどんな思いでそれを受けとめてやれるのだろうか。とまどいや不安で胸いっぱいにしている子どもたちにとって、両親、とりわけ母親の反応は、その後の成長を左右するほどに大きな影響力をもっている。ここでは、子どもの目を通してみた母親の反応を取り上げてみたい。

図9にあるように、「お母さんはよろこんでくれたか」とたずねてみると、「とてもよろこんでくれた」26%、「わりとよろこんでくれた」34%と、6割の子どもたちが成長を祝う雰囲気の中で初潮を迎えていることがわかる。これを学年別にみると、4年生の2人は、お母さんが「とてもよろこんでくれた」と答えている。それにくらべ、5年生26人の中では、母親が積極的によろこんでくれていないという割合が50%、6年生99人の中では37%がそう感じている。

しみじみと娘の成長をよろこぶ気持ちは、どの母親にも共通のもののように思われるが、それがうまく娘たちに伝わってはいないのだろうか。また、娘の「初潮」という突然の成長のサインに、やはり母親たちもとまどいを隠せないのだろうか。十分に、成長を支えてもらえていない子どもたちの心細さを思うと、改めて母親の側にも対応の準備が大切なのだと考えさせられる。

図9　お母さんはよろこんでくれたか



## 女子の中の成熟拒否

子どもたちのデータに見え隠れする様々なとまどいや不安の中でも、最も気がかりなのは、女性としての成長を恥じ、嫌悪すべきものとしてとらえ始めている点である。「おとなになりたくない」「女性でなければよかった」という、いわば成熟拒否の心性は、思春期やせ症に代表される女子の病理として取り上げられることが多い。われわれおとなの、特に女性モデルとしての母親や教師のあり方が問われる問題でもある。

ここで、改めて4年生から6年生までの女の子たちに「おとなになること」への思いをたずねてみたい。

図10は、胸（乳房）のふくらみについて、子どもの身体イメージをたずねた結果である。乳房の発達のステップにそい、子どもにわかりやすい表現を工夫し、「ぜんぜん変わらない」から「おとなと同じくらい大きくなった」までの5段階でとらえている。さすがに、「おとなと同じくらい」と答えた子はいなかったが、図のように4年生で66%の子どもが変化に気づいており、4年生から5年生にかけての変化がやはり著しいようである。6年生では、「かなり大きくなった」と答える子が1割を超えるまでになっている。

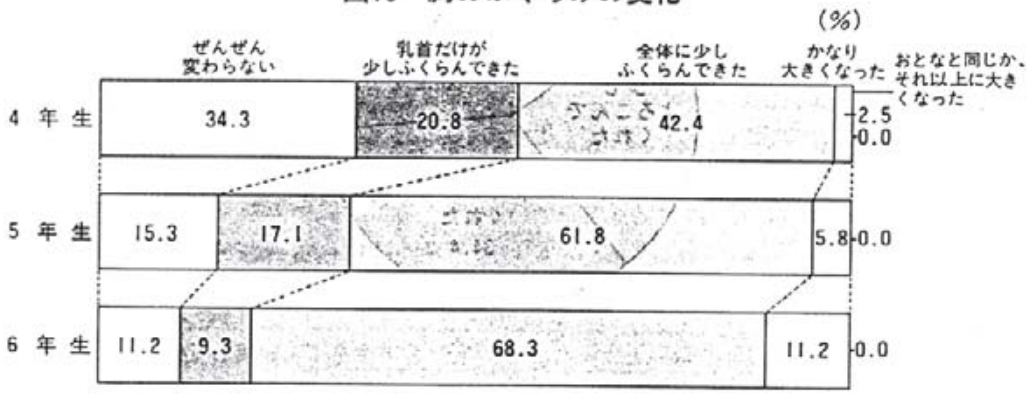
胸のふくらみは、外側からとらえられる成熟の指標であり、女の子たちはお互いに変化に関心を持っているに違いない。図は省いたが、友だちとくらべ自分の胸は大きいほうかとたずねてみると、

とても大きいほう　1.4%
少し大きいほう　14.8%
ふつうくらい　53.1%
少し小さいほう　21.2%
とても小さいほう　9.5%

といったように、早熟タイプの子16%、晩熟タイプの子31%と、成長の個人差を感じている子が半数近くいることがわかる。

では、こうしたからだつきの変化を子どもたちは、どんな思いで受けとめているのだろ

図10　胸のふくらみの変化



うか。図11をみてみたい。

少しずつ胸がふくらんでくることについて「うれしい」「いや」「はずかしい」の3つの項目についての反応を示している。図のように、「あまり・ぜんぜん」うれしくない子が65%、「とても・かなり・少し」いやな子が59%と、かなりの子どもたちが女性的なからだへの変化に嫌悪感を抱いている。

胸がふくらみ始める時期は、チクチクした感じや何とも言えぬ身体の違和感を訴える子も多く、変化へのとまどいや不安が嫌悪感を生み出している状況もあるに違いない。では、少し視点を変え、女性らしさの受け入れという面について、もう一つのデータをみてみよう。「おとなになったとき、胸の大きい女性がいいか」、理想とする女性イメージをたずねてみた(図12)。「うんと大きくなりたい」は、わずかに1%、「わりと大きいほうがいい」を合わせても、いわゆるグラマーな女性を志向する女の子は、全体の4割にすぎない。やはり、女性らしい体つきの象徴ともいえる乳房の発達を否定している女の子たちが決して少なくないようである。

今後、「女性」としての自分を受容し、異性との健全な対人関係を持つことが女の子たちの課題になるわけだが、こうした時期への入口だけに、成熟への拒否感の強さが心配される。

図11　胸のふくらみの受けとめ方

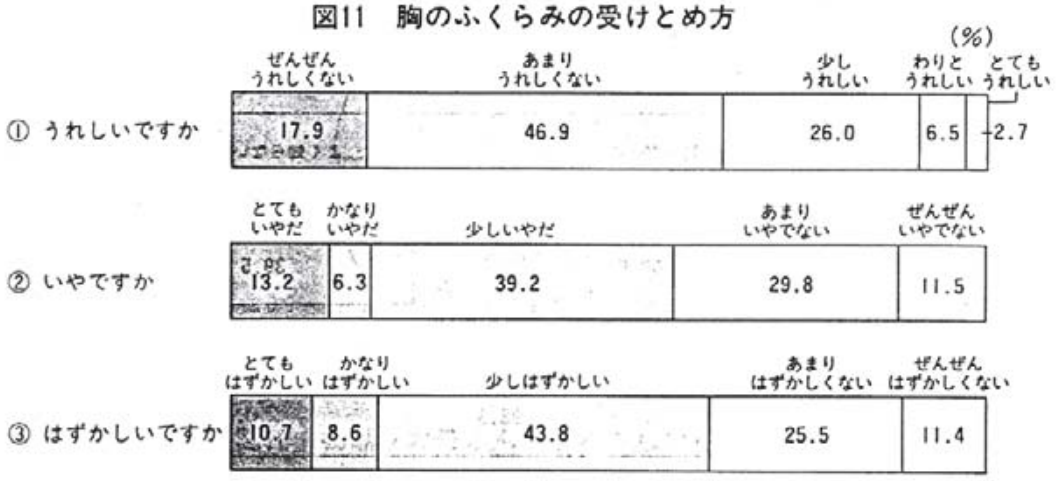
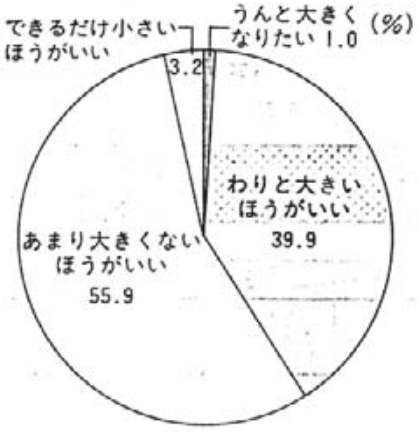



図12　胸の大きい女の人になりたいか



## 性成熟への対応をめぐって

女性的な身体像を否定する子どもたちの姿は、われわれおとなが彼らの性成熟に対し、適切な対応をなしえていないことを示すものといえるかもしれない。ここで、初潮指導や心身の成長を視野においた性教育のあり方を改めて問い直してみることにしよう。

まず、初潮指導についてたずねてみた。図13、14、15がその結果である。女子が初潮を迎えることについて、小学5年生2学期までには、ほとんどの子が知識を得ている。図14を見ると、「5年生で」が39%、「4年生で」が36%と多くの子がこのあたりで一斉の初潮指導を受けている。中には、「3年生で」という子も18%おり、発達の個人差に合わせて、周囲が配慮しているようすもうかがわれる。

そこで、「誰が初潮についてはじめて教えてくれたのか」をたずねると、図15にあるように「お母さんから」がトップで37%、次いで「養護の先生から」が23%となっている。やはり母親が大きな役割を果たしていることがわかる。もう一つ気になるのは、母親、養護教諭に「担任の先生から」の6%を加えて

図13　初潮についての知識
（女子のみ）

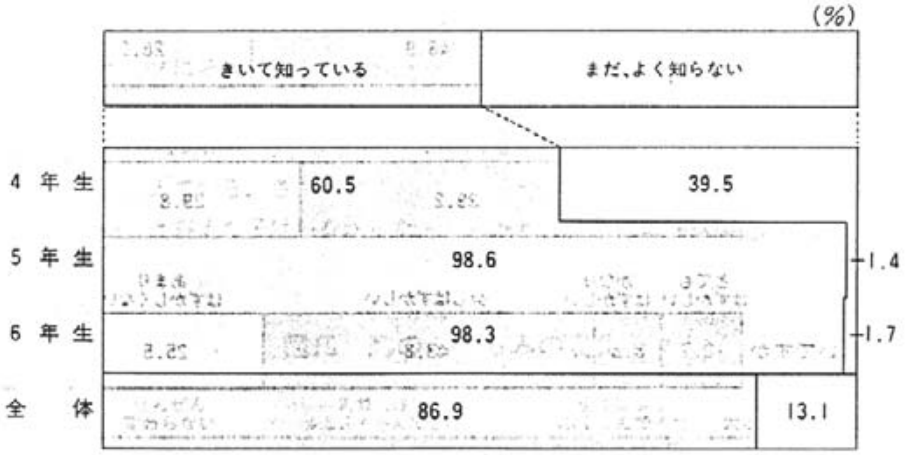
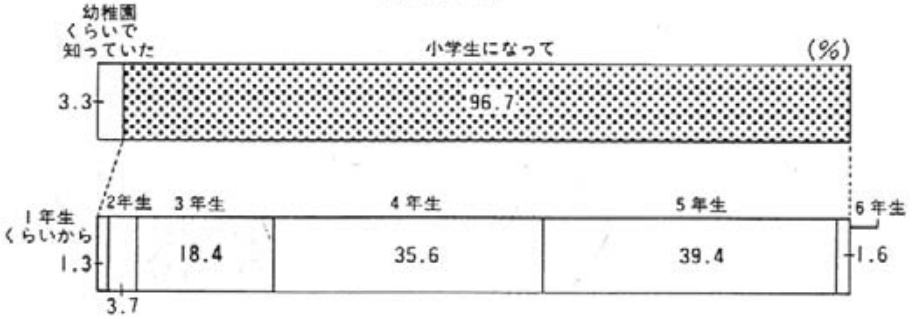



図14　初潮のことをいつ知ったか
（女子のみ）



も、周囲のおとなから初潮について指導された子どもが65%にすぎないという数字である。残りの35%の子どもは、友人の話やマスメディアを通してのぼんやりした知識により、性成熟への準備を始めている。こうした適切な対応の遅れが、子どもたちに余計な不安や混乱をおこさせていないか考える必要がありそうだ。

また、性に関する指導の難しさは、正しい情報を提供することと同時に、伝え手の"性"に対する態度や価値観が子どもたちに微妙に反映される点にあろう。先にも触れたが図16にみるように、初潮を迎えた子どもたちが、「お母さんはよろこんでくれていない」と感じていることと成熟拒否の傾向はその表れといえるかもしれない。改めて学年差をみると、5年生にくらべ6年生のほうが「お母さんはよろこんでくれた」と答えている。両親が子どもの成長にとまどわずに、その成長をよろこべるようになるための準備にも時が必要なのであろう。われわれは、こうした側面への援助をもっと積極的に進めていくべきなのかもしれない。

図15　初潮のことをはじめて教えてくれた人
（女子のみ）

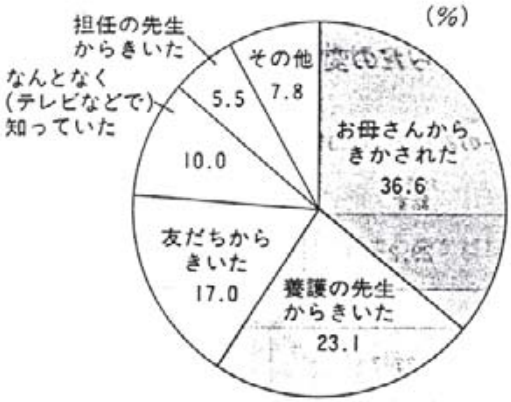
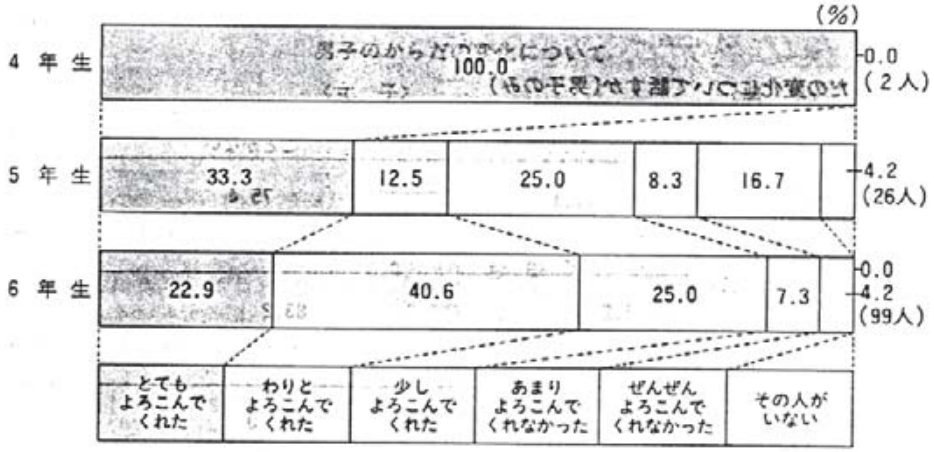



図16　初潮をお母さんはよろこんでくれたか
（初潮のあった子のみ）



## 身体的変化を話題にするか

子どもたちがからだの変化を受け入れてゆくとき、彼らの内に生じている不安やとまどいを打ちあける存在がいるかどうかが大きな支えとなるだろう。

この点について、男女それぞれにからだの変化をどれだけ話題にする関係があるかをたずねてみた(図17)。女の子同士では、「よく話す」「たまに話す」を合わせると35%が仲よしの子とは話せるという。母親の39%が次いで大切な存在となっているようである。両者について学年を追ってみると、

| | 4年 | 5年 | 6年 |
|---|---|---|---|
| 友だち | 14.2% | <35.6% | <51.5% |
| 母親 | 22.8% | <41.4% | <50.1% |

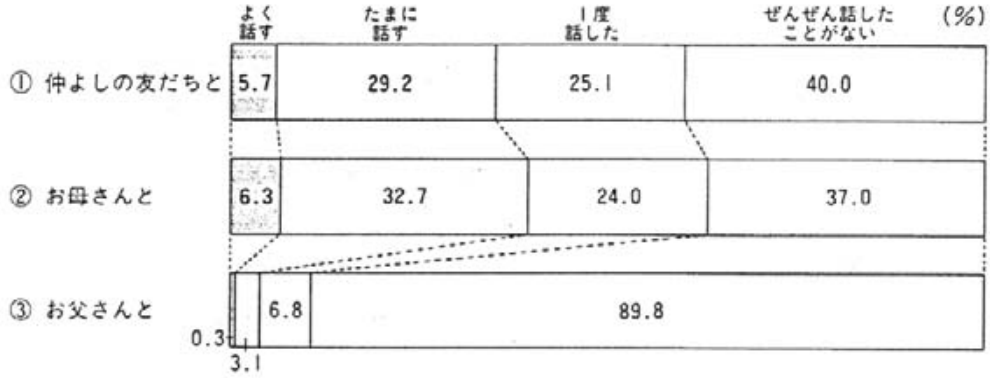
となり、次第に話し合える雰囲気が広がっているようすがうかがえる。

これに対し、父親はどの学年でもほぼ同様の数値で、ほとんど女の子の生理については触れていない。

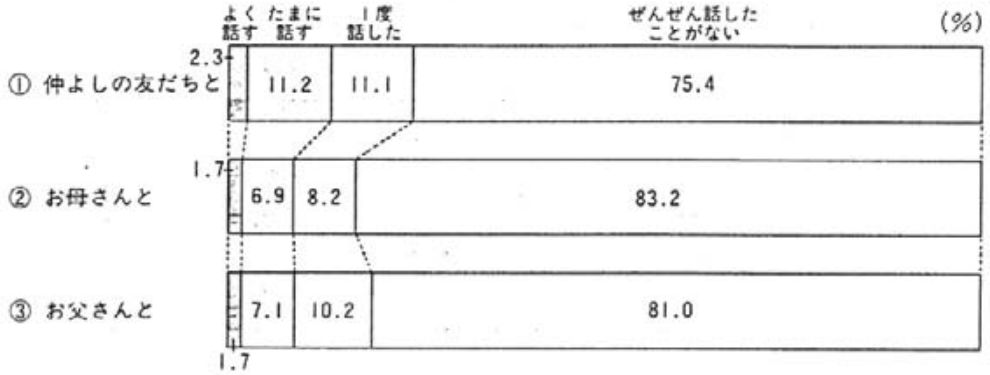
では、男子のからだの変化についてはどう

図17　からだの変化についての話題

女子の生理について話すか(女子のみ)




男子のからだの変化について話すか(男子のみ)

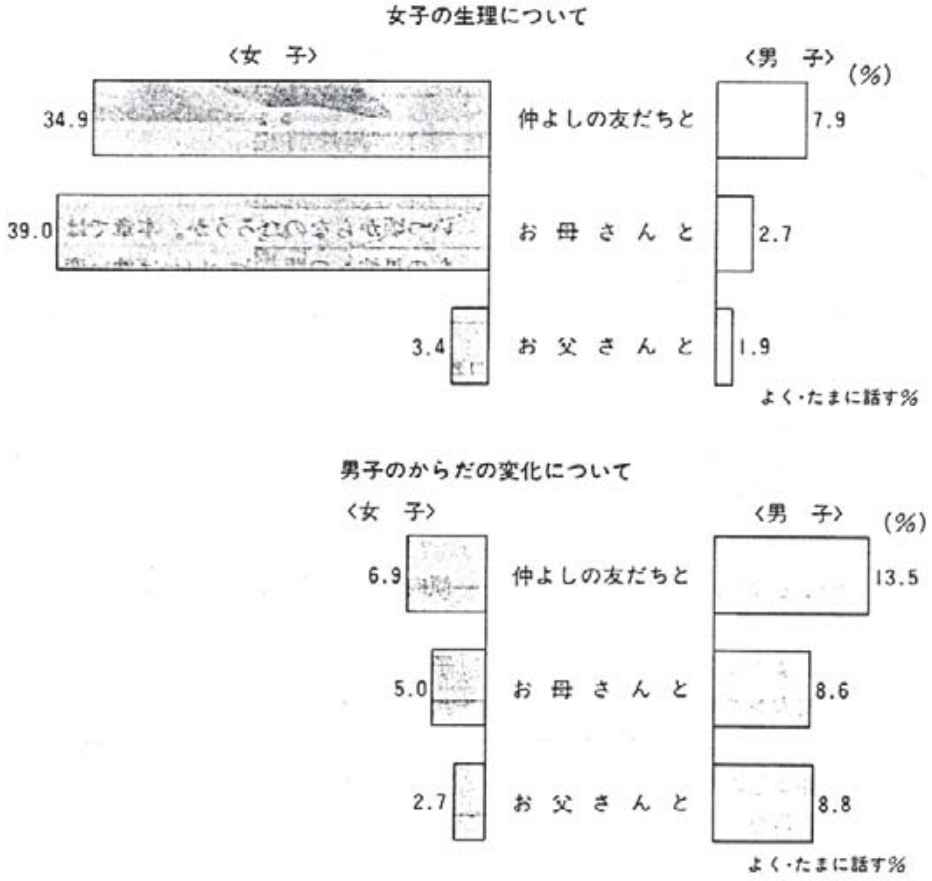


だろう。女子にくらべ、全体に話題にする機会は少ない。「友だちと」がやっと14%、「お母さんと」が9%、「お父さんと」が9%という結果である。男子の性成熟が女子にくらべ1～2年遅れ気味で、しかもその変化が緩やかなこととも関連しているのであろう。小学生段階では、ほとんど触れられずに過ぎてしまうようである。しかし、変声や体毛の発現といった変化が確かに進んでおり、男子に対する父親の接近をもう少し期待したいところである。

次に、男子、女子、それぞれの身体的変化についてはどのくらい話題にしているのか、図18をみてみたい。同性の変化よりさらに数値は低く、両親に限ってみても異性の成長の話題は避けられている。この時期では、同性の友だち間でもあからさまに取り上げられずにいる。男女がお互いの成長を正しく理解し、そうした変化をよろこぶべきものとして受け入れ、大事にすることが性教育の課題といわれているが、この点われわれおとながもう少し勇気を持って配慮すべきなのではないだろうか。

こうしてデータをみてくると、われわれ周囲のおとなたちが自分に与えられた性に満足し、子どもの成長を彼らの心の流れにそって温かく見守れる存在であることが何より求められているように思われる。

図18　からだの変化についての話題



# 3. 異性への関心

こうしたからだの変化、すなわち身体的な成熟は目にみえない形で子どもたちの心にも影響を及ぼし始めているに違いない。異性の姿が同性とは違った輝きをもち始めるのは、いつ頃からなのだろうか。本章では子どもたちの異性への関心と、いわば幼い恋人たちの「つきあい方」をみてゆくことにしよう。

## 雨夜の品定め

まず図19は、子どもたちがどのくらい異性や好きな子のことを話題にしているかみたものである。図が示すように男子も女子も、同性の友人＞異性の友人＞タレントのうわさ＞好きな子のこと、の順で話題にしている。好きな子のことは、仲よしの友人との間ですら、それほど話題にしていない。特に男子はその傾向があり、図20では、「よく話す」「たまに話す」を加えても、女子の45%に対して男子では16%でしかない。

また父親や母親との間では、子どもたちが一層寡黙となる傾向が見いだされる。両親の間ではそれでも母親とは多少話す子もいるが、父親に対してその数値は一層低くなっている。

## 図19　異性や好きな子についての話題
（男　子）

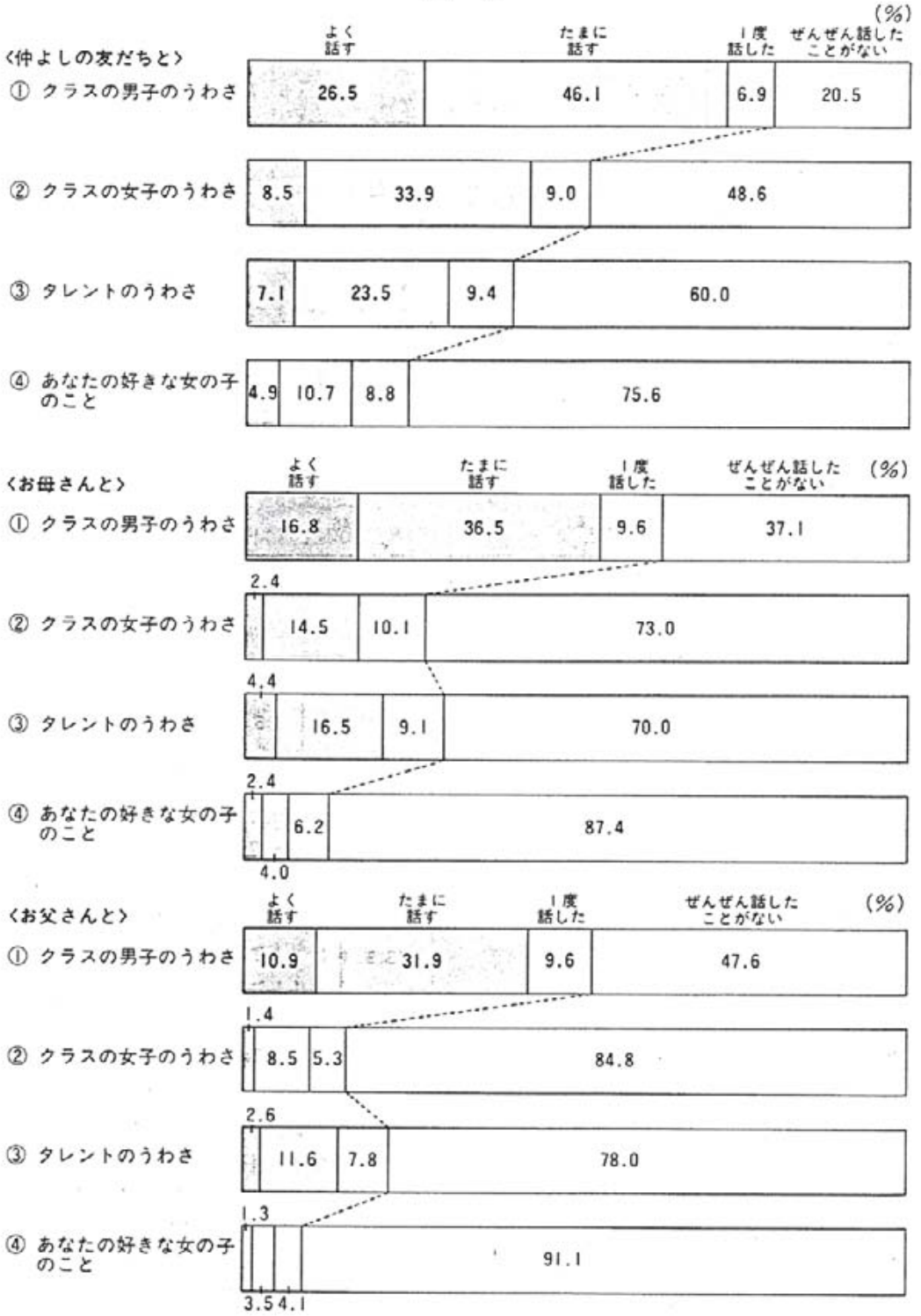


図19　異性や好きな子についての話題

（女　子）

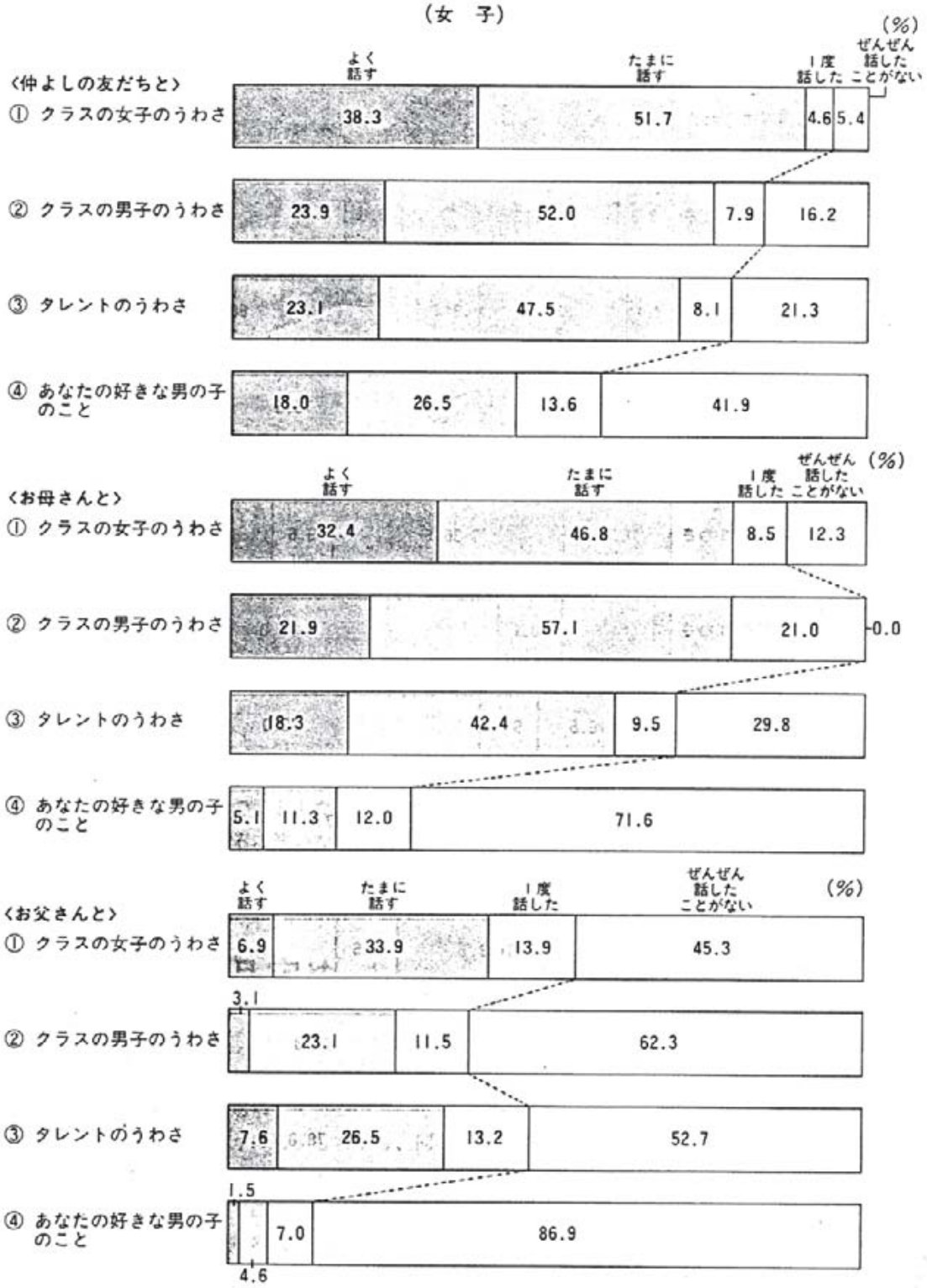
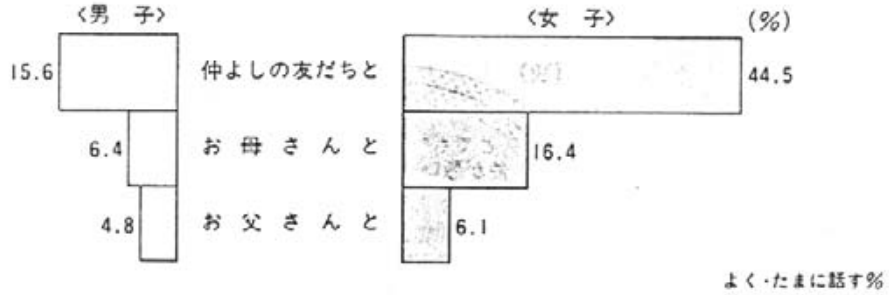


図20　あなたの好きな女の子(男の子)のことを話すか




## クラスの雰囲気

ここでわれわれが気になるのは、好きな子の有無かもしれない。しかしそれをみる前に、まずクラス全体の性的な社会的風土に関わる側面をみてみよう。ここでは男子の調査票の項目と数値の中から、クラス内の雰囲気をみてゆくことにする。

まず図21は、「あなたのクラスは男女が仲よしか」を聞いたものである。「とても仲よし」はわずか1%、「まあ仲よし」も含めても仲よしとみなされるクラスはわずか40%にすぎない。男女がうまく融合しているクラスとそうでないクラスとでは、後者のほうがはるかに多いことがわかる。例えば両端の数値についてもそうだ。「とても仲よし」1%に対して「とても仲が悪い」は18%もいる。こうした傾向は、学年別にみても、4年生から6年生までほぼ同様の数値であり、発達差は特にみとめられない。

以上のような「あまりうまくいっていない」状況を、男子の「クラス内の女子評価」によってみてみると、図22に示したように、「男子から人気がありかわいい子」がクラスの十数人の女子の中に1人くらい、逆に種々の理由で「男子から反発をかっている子」は4－5人という状況である。そして図の右の平均値をとると、学年との関連で、男子と女子がより激しく対立するいわゆる「性的対立時代」は6年生ではなくて、5年生をピークとする現象なのかもしれない。

ともあれ全体としては、「かわいい子」より「かわいくない子」がはるかに多くなっており、前にみた「あまり男女の仲がよくない」とする男子の指摘を裏付けるものかもしれない。

もう一つこの点について、同じく男子に「席がえをするとしたら、隣に女子が来てもいいかどうか」たずねた結果からみてみよう(図23)。図が示すように、「ぜったい女子はいやだ」と答えた男子は33%。これを多いとみるか少ないとみるかは難しいところだが、少なくとも全体の3分の2は、程度の差こそあれ、女子が隣りに来ることを拒否していない。性的対立時代とはいわれるものの、その反発の仕方はかつてほどではないのかもしれない。

さてこうした風土の中で、各クラスに男女の仲よしカップルがあるかどうか、たずねたのが図24である。男子の言によれば全体の34%、つまり3クラスに1クラスでは1組以上のカップルがあり、その平均組数をたずねると、4年生で2.2組、5年生で3.8組、6年生で3.7組となっている。これは、仲よしカップルが「ある」と答えた子どもが把握しているカップル数の平均を求めたものであるが、中には10組以上という子も何人かいて、クラス間の差の大きいことがうかがわれた。

図21　クラス内の男女の仲（男子からみて）

図22　女子について（男子からみた）

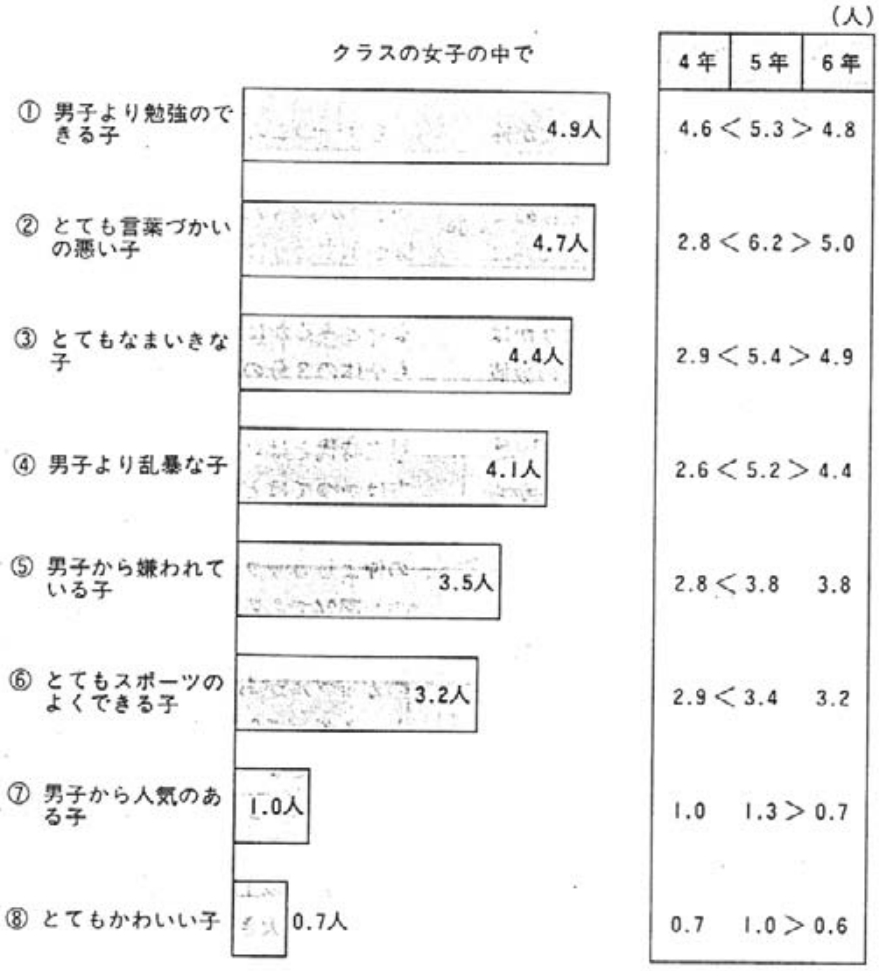


図23　もし席がえをするとしたら
（男子のみ）

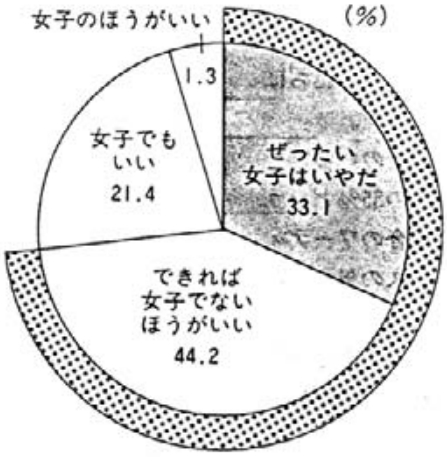
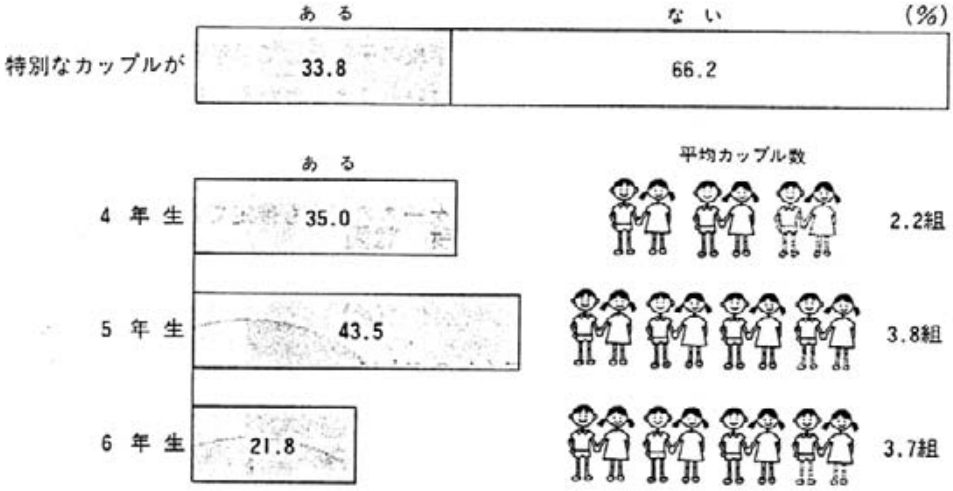



図24　クラスに男女のカップルがいるか
（男子のみ）



## 好きな子(異性)がいるか

こうしたクラス風土の中で、子どもたちには「好きな相手」がいるのだろうか。

図25に示したように、好きな子のいる割合は男子で28%、女子はその2倍の55%という高い数値となっている。この場合のワーディングは「同じクラスや他のクラスの男の子の中で、好きな子がいますか」であった。その前に「好きなタレントがいますか」などの質問が置いてあるので、これが、いわゆる恋人に近いステディを意味するかどうかは多少疑問があるものの、しかしほぼそうした雰囲気で設けられた質問に対する反応である。

これを中学生約500サンプルに対してたずねてみた結果は、以下の通りである。

| | 男子 | 女子 |
|---|---|---|
| つきあっている相手 | 7.4% | 10.3% |
| 片思いの相手 | 43.0% | 52.7% |
| 計 | 50.4% | 63.0% |

「好きな相手」がいる割合は男子で5割、女子で6割となり、今回の数値をやや上回るものの、比較的近い数値となる。小学生と中学生に共通しているのは、女子のほうが男子より心の中に「相手(片思い、両思いを問わず)」をもっている点だろう。これは高校生のデータの「つきあっている相手」男子15.0%、女子20.3%という数値とも同じ傾向にある。

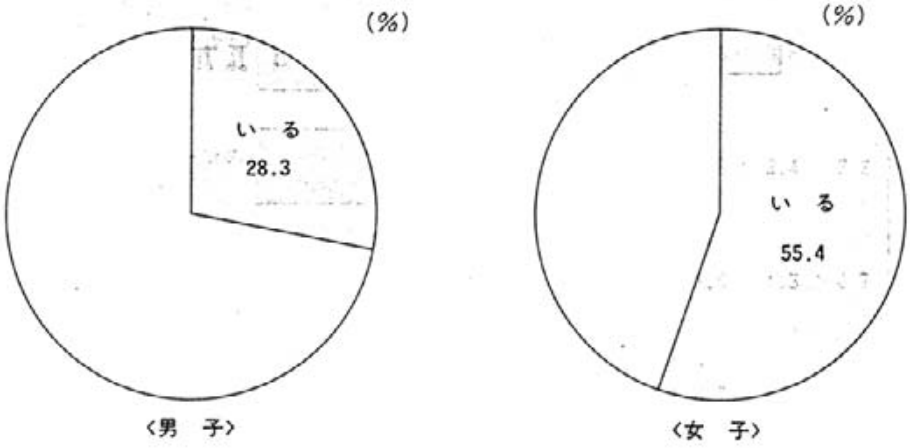
恋愛に関しては女子のほうが関心をもち早熟な傾向が指摘できそうだ。

次に図26は、学年との関連だが、思ったほどの学年差がないことがわかる。

さて図27は、その好きな子の属性だが、同じクラスの子が男子46.0%、女子45.9%と、これも中学生の78.6%、53.6%と同じように、最も手近な恋はクラス内で生まれるのが一般的なスタイルのようである。

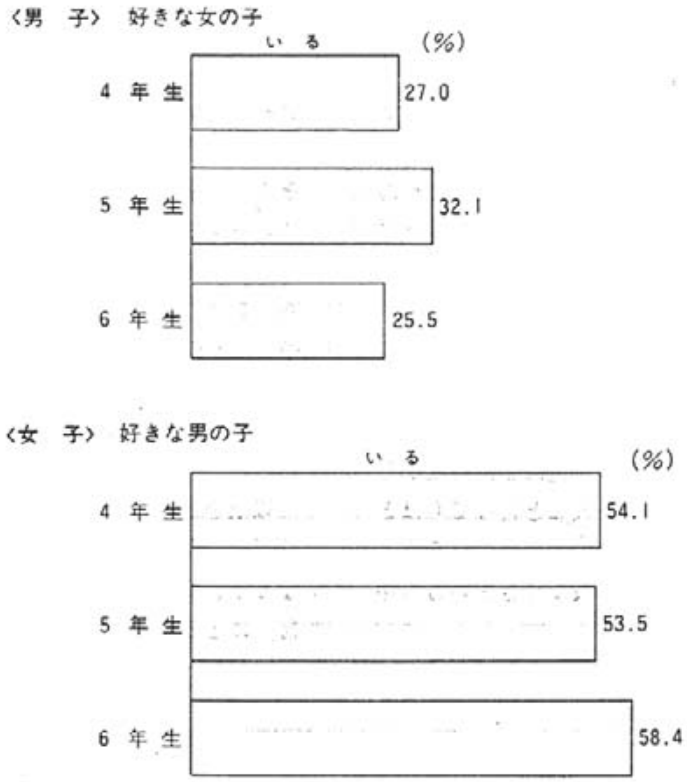
しかしとは言っても、他クラスの子やちがう学校の子、そして学年がちがう子も半数以上はいることもわかる。特に学年や学校がちがう対象の場合も多く、「好き」が単に好きというより、恋愛に近い「特別の関心」であるケースの存在も推定できそうだ。

図25　好きな男の子(女の子)がいるか

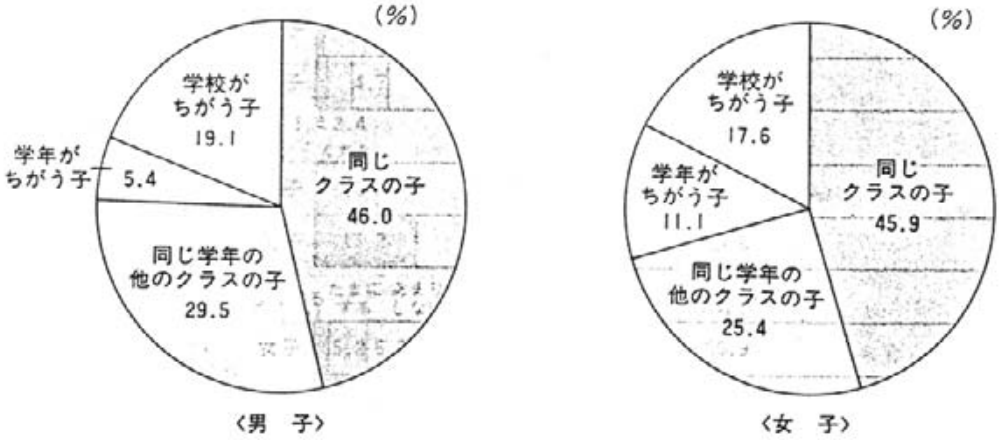



〈男　子〉　〈女　子〉

## 図26　好きな異性の有無×学年




## 図27　好きな異性との関係



## 好きな子とのつきあい方

では、その「好きな子」とどうつきあっているか。図28(1)(2)をみてみよう。図の(1)は恋人に近いつきあいのパターン、(2)はふつうの友人間で一般的に見られるパターンに分けてある。おませさんな女子の数値をもとにみてゆくと、とても「その子のことをよく考える」子は女子38%男子17%、「その子の写真を持っている」子が同じく65%と39%、「バレンタインデーのチョコレートのやりとり」の42%と31%が大きな数字で、他は1割程度かそれ以下である。「好きな人」と言ってもほとんど片思いに近い、胸の中の恋なのだろう。その傾向は、図の(2)の一般なつきあい方の中でも見いだされる。

しかし全体としては性差があって、イメージ・レベルのつきあい方は女子のほうが男子よりよくしているが、「お誕生日プレゼント、その子の家に行く、あなたの家に来る、電話で話をする、2人で買い物などに行く、交換日記」などのより直接的または本格的なつきあい方は、割合はごくわずかだが、中では男子のほうがよくしている。

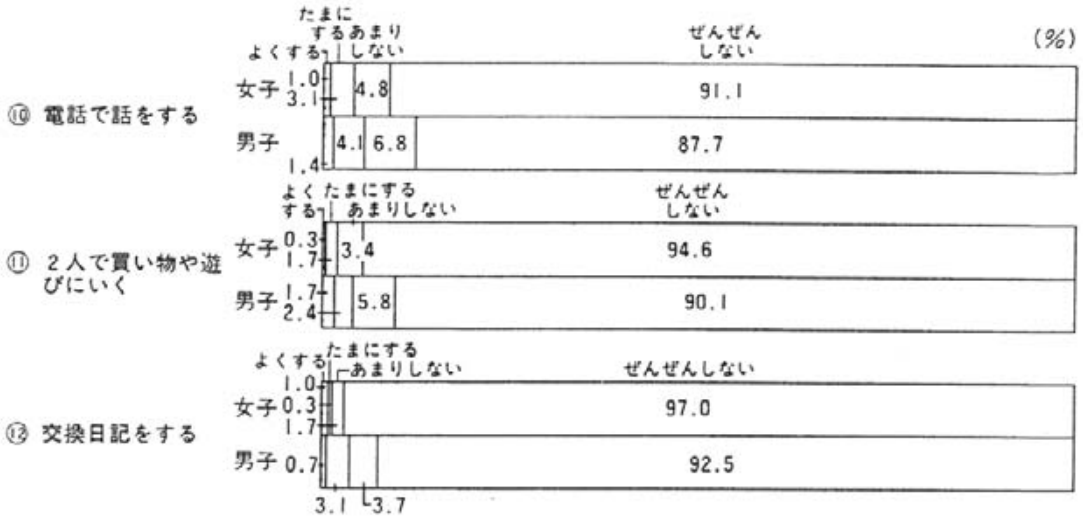
これは図28(2)をみると、友人的なつきあい方をやはり女子がよくしている点とも共通である。

以上をまとめてみると、女子のほうが対異性行動に関心をもっているが、実際の行為となると、女子はまだ単なる「あこがれ」や「空想」にとどまっている状態といえそうである。

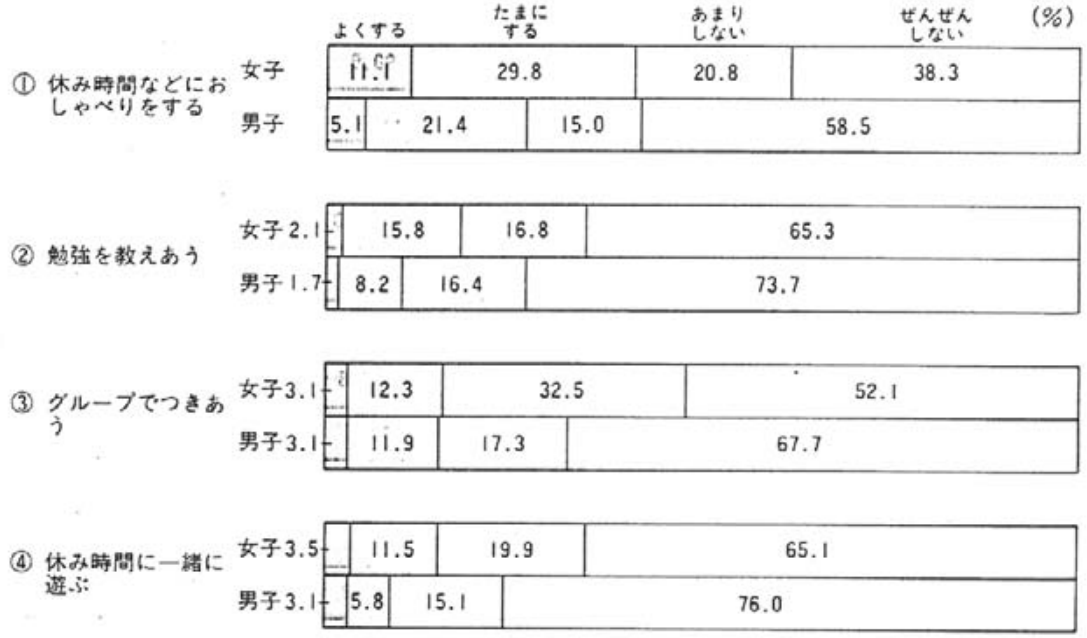
## 図28　好きな異性とのつきあい方(1)

(%)

図28　好きな異性とのつきあい方(1)



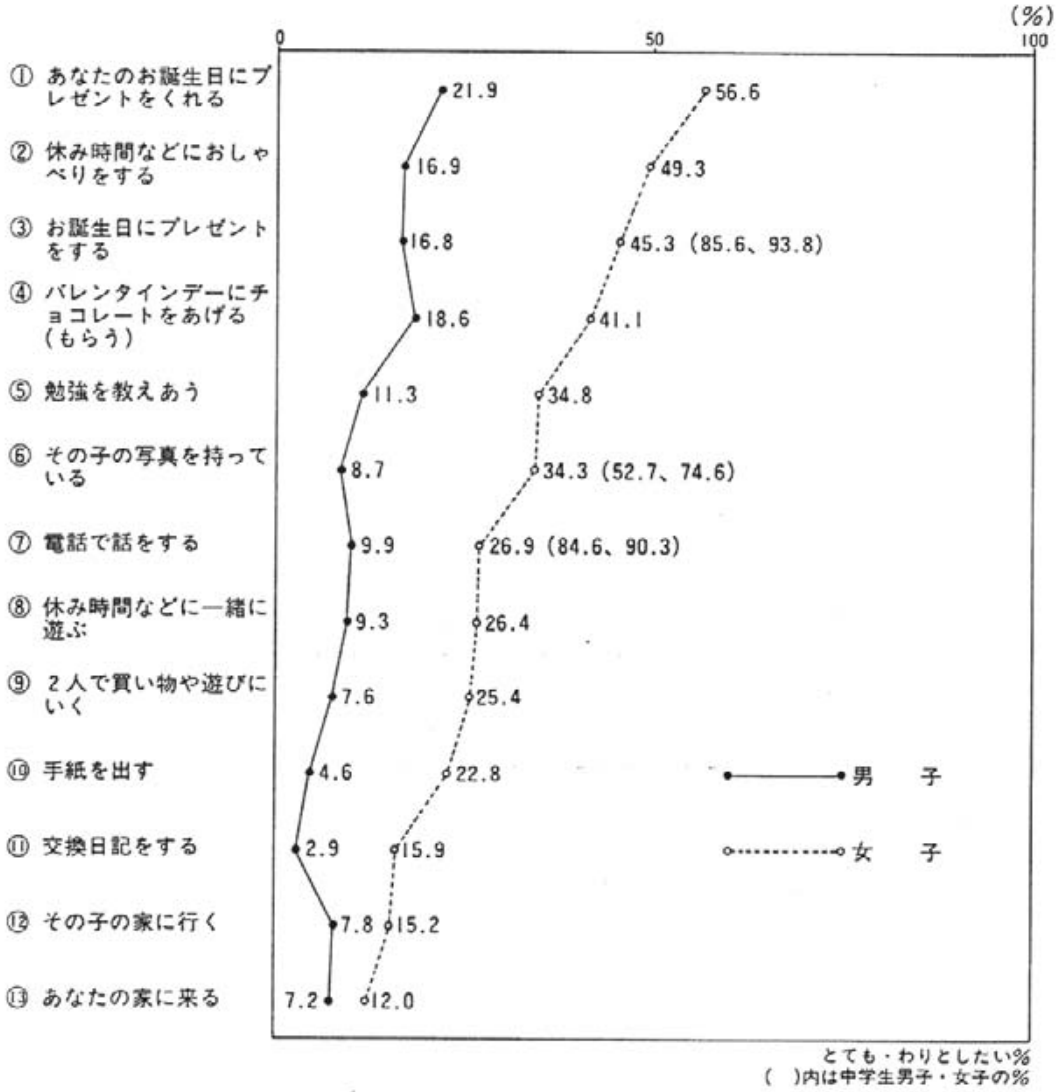

好きな異性とのつきあい方(2)



## こんなふうにつきあいたい

以上、対異性行動としては、まだごくおだやかな子どもたちだが、その心の中の準備状態はどうか。「将来好きな人ができたら、どういうふうにつきあいたいか」をたずねたのが、図29である。全体としては女子のほうが、こうした異性とのつきあいに、より積極的な関心をもっていることがわかる。「プレゼント、おしゃべり、チョコレートをあげる」などの幼い形を上位にして、下位のより直接的な「家に行ったり来たりや交換日記、手紙を出す」などに至るまで、どれに関しても女子の欲求が強いことがわかる。この点はこれまでに行われた中学生対象の調査でも同様の傾向が見いだされる。

図29　好きな子ができたら、どんなふうにつきあいたいか

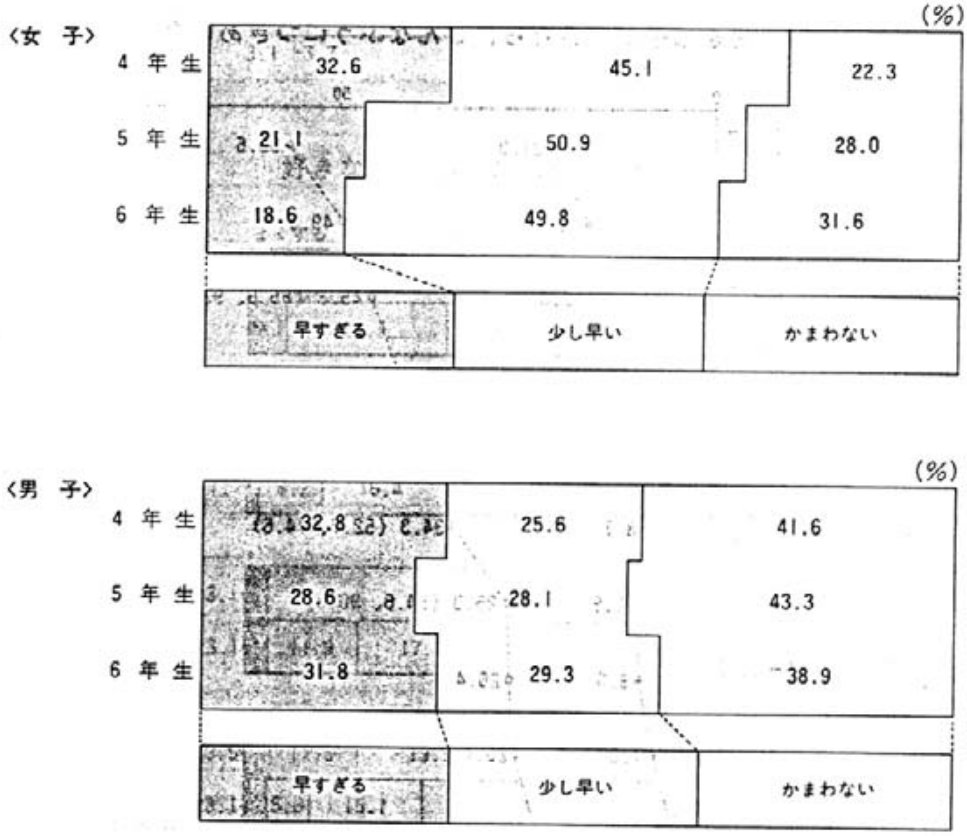



とても・わりとしたい%
(　)内は中学生男子・女子の%

こうした数値を中学生の数値とくらべてみると、カッコ内に示されたように、「お誕生日のプレゼント、写真を持つ、電話で話をする」のいずれの数値も、中学生にくらべはるかに低いものであることがわかる。小学生の恋は、まだ幼くて不完全なものといってよいのかもしれない。「好き」という感情も、まだ十分に発達したものではなさそうである。

さて図30はこうした「1対1の交際（異性との交際）は早いか、それともかまわないか」をたずねたものである。図が示すように女子は「かまわない」とする者が4年から6年にかけて、22%、28%、32%と少しずつふえており、男子は約40%で大きな変化はない。いずれにせよ、残りの6割前後（女子の場合は7～8割）は、小学生段階でのこうした異性とのつきあいを多少とも早すぎると考えていることがわかる。まだ何といってもおとなの価値をかなり内在化している年齢なのだろう。

図30　1対1の交際は早いか



## どんな雑誌を見ているか

最後に子どもたちが、どれくらい性情報や性的刺激にふれているかをみてみよう。図31は、15種類の青少年がよく読む雑誌を掲げ、それを読む度合いをたずねたものである。「発売されたら必ず・かなり」読む子の割合をひろってみると、男子では『少年ジャンプ』が66%でダントツ。他は小学4、5、6年生以下僅少であり、女子は『なかよし』30%、『明星』17%、『少年ジャンプ』13%くらいまでが目立つ程度で、他は男子同様ゼロに近い数値となっている。

この中で『明星』については、これまでの中学生対象の調査結果では中学生女子33%であり、小学生女子17%がわずかに追いかけているだけで、全体としては小学生に対してはそれほど多大な性情報が入ってきていないことが考えられる。いまその必要性が説かれている「性教育」を、こうしたニーズが出る前に行うのがよいか、またはニーズの大きくなった時点（中学生や高校生）で行ったほうがよいか、「性教育」のあり方についても一考を要するのではなかろうか。

## 図31　雑誌との接触状況

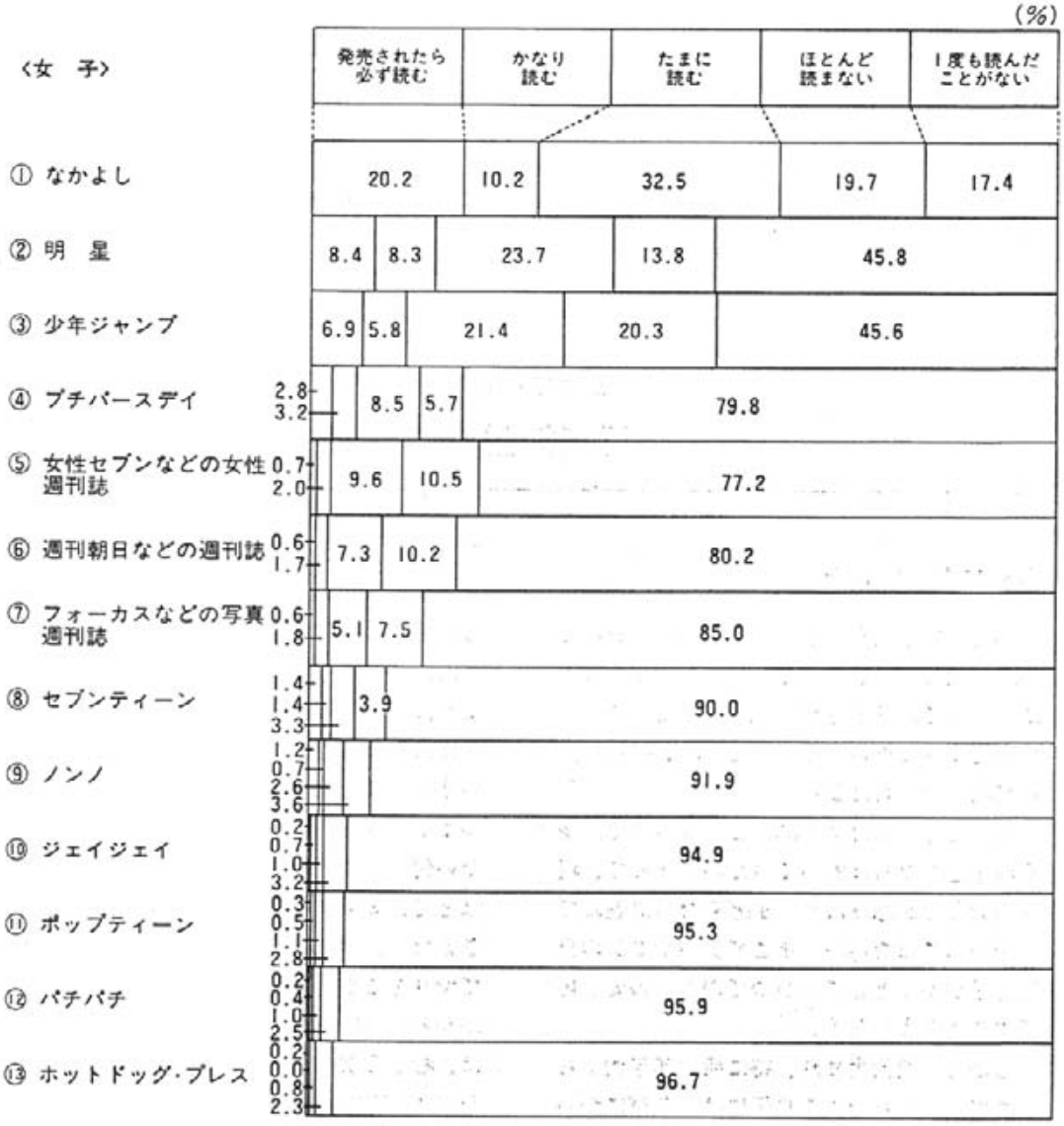



図31　雑誌との接触状況